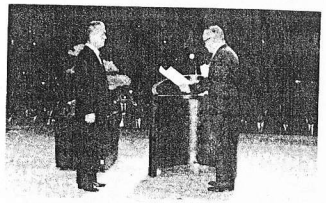
学体連会報

発　行　日　昭和61年　1月15日
東京都渋谷区代々木神園町3番1号
国立オリンピック記念青少年総合センター内
財団法人　日本学校体育研究連合会
発　行　者　会　長　大　石　三四郎

自然科学と人文科学・社会科学

会　長　大　石　三四郎



功労者表彰を受ける沖縄県中村正徳先生

昭和60年12月中に政府は研究交流促進法を閣議にかけ、今年度の国会に提出しようとしている。主旨は、産・学・官の協力により、わが国の研究を促進しようとしているのである。ことに、民間活力を学・官に導入することによって研究に活力をつけようというのである。一般に政府機関の研究所は基礎研究を重視している。ところが、民間の研究は時限的応用面のものが多い。したがって、この全く相反すると思われる研究部門を組み合わせることによって、研究面の様相は多く変化すると思われる。したがって、その研究形態は恐らく、プロジェクトシステムが多くなると思われる。ただ、ここに懸念されることは、各研究所や研究者がその個性を失うのではないかということである。協調・協力も全員でチームを組んでやるのであるが、その人間調整はもとより、協力すべき研究のポイントに心を奪われて、研究所や研究者の個々の独特の能力が影をひそめて、本当の実力が失われるのではないかと思うのである。何といっても、研究交流の促進は、至極良いアイデアとは思うが、得てして交流促進は「個人を殺すことだ」と考えるむきが、知らないうちにプロジェクト研究全体の流れを損なうことになりかねない。

そして、科学技術庁段階の原案には人文科学を除くという文字があるのには驚いた。往々にして、自然科学または、自然科学の色合の濃い研究部門は人文科学的臭が入ってくると、揄揶したくなり、その研究部門の特色が失われるが如き言動を弄する人がいるが、これは大きな誤りといわなければならない。

元来、研究分野を自然科学・人文科学・社会科学などと分類するが、この分類そのものはあやまりではないにしても、人はこの研究分野を区分する以前において、研究の本来の意味を考慮しなければならない。科学が系統立てられなければ、それは科学ではないとしたり、その論理体系が整っていなければならない、などとするが、それは一つの研究のためのアプローチの方法であって決まりはないのである。したがって、始めから自・人・社という区分けをせずに、自・人・社など人間の関連するすべての方法を自由に組み立てて、研究を進めていく分野がないわけではない。それは確かに、今日までの科学の概念には入らないかも知れないが、人間に関係したものを研究する場合はあり得ることなのである。

現に経済学なども自然科学的手法で研究を進めてきたのが、社会科学的方法を導入しなければならなくなってきている。環境問題などはその例である。

このように本当のところは、人間研究は、単に一つの科学分野だけではどうにも処理できないというのが、本当のところではないか。むしろ、人間に関係した研究では一つの科学分野で進めていくと、知らない内に他の分野へと入りこんでいくのである。

〈論説〉

これからの学校体育に望む

参議院議員　柳川覚治

これは昭和60年11月25日のインタビューを文章化したものです。（文責　重田　一）

子供たちの非行、暴力行為、今はいじめ、これらを思うとき、本当に子供を人間として、将来、社会で生き抜いて行く人間、社会人として育てようとしているのだろうか。一番疑問ですね。それはなにも学校だけではない。家庭、学校、社会が本当に子どもを、ひとりの人間として、社会人として、世の中に生き抜いていくように育て上げなければならない。親にも学校にも、その責任があります。社会にもあるのだということを、全体に今問われてきたと思います。一連の問題について、子どもを客体のようにして論じているのではないかという疑問を、私は最近もってきました。いや以前からもっていたといった方がいいかもしれない。子どもは親権によって保護され、管理され、育てられていくものです。

そこで、学校体育は一体何をするのか。学校とは子どもが常に生き生きと活力をもって学び、跳びはね、遊びはねているところだと私は思うのです。子供は日々、組織細胞が成長し、身体が躍動し、心が弾んで跳びはね、勉強もし、目も光らせている。正によく学びよく遊べですね。この世界が学校だと思うんですよ。この学校、こういう学校を学校体育で取り戻して欲しいというのが、先ず第一の願いです。

学校体育の正規の時間は、1週間に3時限とかに限られていますが、朝礼、それもやっていない学校もあるが、つどい、休み時間、それから放課後のクラブ活動や部活動を通して、本当に子どもが生き生きとした元気な子だという、そういう学校に是非、学校体育を通して回復してもらいたい。今、大体子どもが発散しきれてないんじゃありませんか。それは年令層によって注意をしなければならないけれど、人間は自ら挑む、挑戦する、それが子どもですよ。自分がどこまで耐えられるか、もつかという、極限への挑戦ですよ。それを小学生は小学生なりに、中学生は中学生なりに、高校生は高校生なりにやらせることが大事なのです。高校生はもう一人前ですよ。中学生でも15才になれば一人前です。案外、極限まで自分はもつんだ、自分の身体と意志は耐えられるのだ。その体験を学校体育で徹底的に持たせてやって欲しいのです。それが学校体育ですよ。

それはマラソンでもいいし、野球でもいいしね。あるんですよ、体育の活動のなかには、まさにそれが。だから本当に躍動することと、極限への挑戦、そこに子ども自ら極限への挑戦に耐えられたという喜び、歓喜を感じ、自信を得るというところ、この二つを一番期待しています。個々の技術的なことはあるけれどね。

今年、鳥取国体がありました。これを見て私感激しましたよ。国民体育大会というのは、次の世代を背負う子ども達、幼稚園児、小学校の児童、中学校の生徒、高等学校の生徒が参加する。だから国体は単なる社会体育じゃありませんよ。学校体育、社会体育みんな含めた、正に国民体育だという姿が見事に実現したということに大変な感動を覚えました。これは私自身が取り組んできたことですからね、体育局長でいましたからね。

5才児から18才の子どもたちまでが集団演技を演じた。この感銘ね、これは大変な感銘でした。国民体育大会は学校体育の延長線上にあるんだと、学校体育そのものなんだと。それから、世界選手権の参加は学校体育の延長線上にあるんだと。それがこういう形で表われたんです。特に鳥取は小県ではありますが大変な成績を収めた。高校生の大変な活躍があった。鳥取県が小学校体育、中学校の対外競技、高校は勿論、早くから、小・中・高の体育指導を徹底してきたということの成果が、正に競技成績の上にも表われていた。お見事でした。体育というのは、その気になれば明らかにその成果は表われるのだということを証明したということですね。喝采を贈ります。

この間、ある国の大使がね、「日本はいい仕組ができていますね。学校で体育を広く指導し、そしてまた社会でスポーツがこれだけ普及していますね。社会体育が。日本は本当にすばらしい仕組ですね。」と僕に言われたことがあるんですよ。学校で基礎、基本を教わるということね。まあ、学校でスポーツに触れると、世の中に出てから恥ずかしくなく、色色のスポーツに親しめるという、そういう意味で、小・中・高を通じて色々なスポーツに触れるようにしていくということは、生涯、スポーツを伴侶にするということの基盤づくり、基礎づくりとして、本当にいい成果をあげてきているということを感じますね。ただ講義ではなく、やはり体育の実践を通して教えるんだということですね。「20分以上講義していたという体育指導があった」と外国の人が来て言っていた。「それは保健の時間じゃないんですか」「いや体育の時間だ」と。

やはり、大変だけれど先生方にクラブ活動、部活動の指導に、また子どももそれに生き甲斐を感じているので、頑張って下さることを期待します。

世界のスポーツは愈々強くなり、人類の記録への挑戦は益々盛んになってきている。その世界において尊敬され、信頼されて活躍する日本人が問われています。益々国際化する社会のなかで、日本人が国際競技に参加して優勝の栄誉を得るということは、至難のことになっている。しかし、高さの挑戦に遅れをとった民族は滅びる。一国の命運に関する問題です。だから国際競技において、日本人が参加して栄光を得るのは至難なことだけれども、これは民族が生き抜く証の問題です。それはやはり学校体育だけでは補えないと思うだろうけれど、学校体育にその証を証明する基礎、基盤以上のものがありましょう。基礎以上のものが学校体育のなかにあるんだということですね。そういう意味で、競技スポーツの向上に対する学校体育の役割は今後益々大きくなって行く。その辺の仕組を一般の子ども達も、体位向上、体力づくり、実行スポーツと同時に、優れた素質のある者をより鍛練して、世界に通ずるスポーツ選手にすることも、学校体育の役割りに入りますよ。その辺がこれから益々問われてくるでしょうし、運営の上から色々の問題があると思うけれども、学校全体の相互間、また学校体育の連盟、協会等の大きな力で、この夢を実現させることを心から期待しています。

現場での研究活動はなぜ必要か

―実践的研究の意義と内容―

学体連　常務理事
筑波大学教授　江田昌佑

ヒトの生活の中に運動があり、スポーツという活動が人間の形成過程やヒトに関して意味をもっているならば、指導者の役割りはいかなるものと考えらるのか。指導者は、①より完全な諸技能の与え方、②それから得られる影響、をより好ましいものにしようとする慎重な考慮と努力が必要であり、またそれを遂行する任務があるのではないか。

ここでいう指導者には学校体育の体育教師がそのまま当てはまる。①②の意図するところは、やや完全主義的なきらいはあるが、より好ましいものにする努力を主張しているのであって、そこには、教師自らの改善へのたゆまぬ努力、試行錯誤的ともいえる問題解決等による豊かな経験にもとづく累進的進歩が中核的な骨ぐみになるといえよう。

さて、学校体育は小、中、高校或は大学を通しても、運動の実践を除いては存在の意味はない。体育教師は可能な限りの努力をして、運動実践の方法に関し、より効果的なものを求めていかなくてはならないのである。すなわち、この類の経験（研究、努力、工夫）の豊かさが重要な要素になる。体育授業では、優れた教師とそうでない教師との差が大きいのが特徴的であるといわれるが、当然のことであろう。

現場での研究活動のあり方は、体育授業の研究（公開授業等による）が身近かに存在し、中心的なものになると考えられる。公開された授業を主題にして、教師仲間がお互いに率直に建設的な意見を出しあい、多くの知見が交換されて指導法の改善がはかられる。授業者だけではなく、その場に参加した者すべてが、方法上の問題について多くの研修の成果をあげることは疑う余地のないところである。

指導論としてのキーファクターは次の3つをあげることができる。

○ねらいを明確化すること。

○効果的な指導を意図すること。
○科学的合理的な立場に立つこと。

ねらいの中で忘れてならないことは、最大限の活動の保障と技術の習得であろう。内容的には、常に改善や修正が加えられること、新しい技術の導入は少しずつの方がよく、そして達成感が十分得られるように計画される必要がある。特に効果のあがる運動を用いること、正しい方法、能率的な方法を採用することについては、教師自身の能力や工夫に負うところが多い。授業研究や実践研究の観点は、上述した3点にもとづいて、分析・検討することが当を得たものとなる。

技能習得の学習やゲームをさせて、ミスを見つけては文句をいうだけでは、現在のあるべき指導者像には程遠い。指導の目的は学習者に対して、各個人或は各単位集団の技能を合理的に習得させ、また改善することにある。そのためには、指導計画に関して万全の準備をすることであり、授業研究の進歩発展に通ずる重要な方法でもある。と同時に、その基礎になるものとして、教師自身の自己評価が重要になる。

○何がうまくいったか。
うまくいった運動課題について、大いにほめ、効果のあがっていることを強調して、次への意欲を喚起しておく。
○何がうまくいかなかったか。それはなぜか？
もう一度やり直す必要があるなら、次の時間の課題として解決できるように、心がまえもふくめて指摘しておくこともよい。
○改善、修正
教師、学習者ともに十分な満足が得られるように、そして次の課題について積極的なとり組みができるようにすることが大切である。

職場での研究活動のすすめ方

学体連　常務理事
新宿区立大久保中学校校長　　遠　藤　秀　夫

はじめに

「教育とは一口にいえば、どういうことですか」と問われた時、私は「それは教師の人格と生徒の人格のぶつかり合いである」と答えている。教師と生徒の人格がぶつかり合った時、生徒は教師の持っている全てのものを吸収しようとする。吸収されれば当然補充しなければならない。その充電こそ、教師の研修であり、教育公務員に研修が義務化されているゆえんであろう。以下研究活動について私見を述べ、参考に資したい。

1. 現場での研究活動の問題点

現場での研究活動には、いろいろな形態があり、それぞれに問題点があるが、基本的には次のようなことが考えられる。

① 専門家という過剰意識はないか

体育の専門教師は、ともすれば自分の授業に絶対的な自信を持ち、他から教わろうとしない。これに対し、小学校教師は、体育は専門家ではないという意識から、常に学ぼうという謙虚さを持つ人が多い。

謙虚さのないところに向上はない。

② 研究活動を、おっくうに思ってはいないか

忙しい学校生活の中で研究活動はたしかにめんどうであり、おっくうなことである。そんなことから昨年指導した内容を、今年もそのまま指導する。運動好きな生徒は活発に動く。それで“よし”としてはいないだろうか。

③ 校外の研修会は躊躇する

校外での研修会に参加する場合、授業を他の教師に依頼していかなければならない。これが心を痛め出かけることを躊躇させる。しかし研修が義務づけられている真の理由を理解して“いま”1時間が将来何十倍もの価値をもって返ってくることを確信したい。

④ 教科体育と部活動は学校体育の両輪

ともすれば、教科体育の研究より部活動の指導に力を入れ、それに生きがいを感じている教師が多い。

部活と同じように、教科体育の指導を深めることは学校体育として忘れてはならない問題である。

2. 現場での研究活動のすすめ方

前述の問題点をふまえながら、次のことを考えて実施したい。

① 「よい授業」を目指して

よい授業とは、体育の目標に向かって生徒を変容させることである。いい授業ができたかどうかを、客観的に評価できない場合でも、常に計画―実施―反省のサイクルを考え、「いい授業」を目指して努力することが、研究活動の基本であろう。又生徒の感想文などからも学ぶことが多い。

② 校内研修会―教科部会の話し合いの中から

中・高校では1教科を全校で研究することは非常にむずかしい。従って教科内での話し合いを頻繁に持つことが有効である。遠慮なしに話し合う中に、参考になるものは極めて多い。時にはそれぞれの得意の運動の実技研修会を行い、相互向上を図ることができればすばらしいことである。

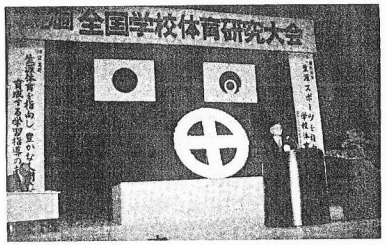
③ 校外研修会への参加

校外へ出かけることは、心を痛め躊躇しがちである。しかし百聞は一見にしかず、他人の授業や研究発表を見聞することは、得るところが極めて大きいものがある。更に他校の生徒の動きや生活態度などを、自校の教師や生徒に情報として提供することは、今後の指導に大きな意義を持つことである。

以上、要点のみ述べたが、要は「もう少しいい授業をしたい」という謙虚な姿勢が、現場における研究活動を活発にする原動力であろう。そこからは、いろいろな工夫が生まれ、「困難」を「可能」にしていくことであろう。

第24回全国学校体育研究大会（鹿児島大会）を終って

鹿児島県実行委員会事務局総務部
鹿児島県立錦江湾高等学校教諭　　峯　　信　夫



文部省澤田道也審議官の挨拶

第24回全国学校体育研究大会鹿児島大会が、昭和60年11月14日(木)、15日(金)の2日間、鹿児島市を中心として県下五市町、15分科会会場校(園)で、県内はもとより全国各地から2,600余名の参加者を迎え盛大に開催されました。

第1日（全体会、鹿児島市民文化ホール）は、あいにくの雨となり参加者の出足が危ぶまれましたが定刻には満席となりプログラム通り進行しました。

午前中は、表彰式に続いて開会式、公開演技、オリエンテーション、午後からは、お茶の水女子大学文教育学部長、森隆夫先生の「生涯スポーツを志向する学校体育の課題」というテーマで今後の学校体育のあり方等について講演がありました。

豊富な話題とユーモアで私たちを魅了した講演でありましたが、中でも、長所にはアクセルを!!短所にはブレーキを等人間としての生き方を示唆してくださった講演でした。

第2日（分科会、県下5市町、15分科会会場校〔園〕）は、第1日とは、うって変って快晴に恵まれ、それぞれのテーマに応じて公開授業、研究授業が行われ、その後熱心な研究討議等がなされました。

こうして、本研究大会は、成功裡に幕を閉じましたが、本県においては、昭和58年度から県学校体育研究会と県教育委員会が密に連携をとりながら大会実行委員会を組織し、具体的な実施計画、運営のしかた等、大会へむけて準備をすすめてきました。

もちろん、その間、文部省や日本学校体育研究連合会から適切な御指導、御助言をいただき「生涯体育を指向し、豊かな人間性を育成する学習指導のあり方」をテーマに設定すると同時に、本県独自の「自然体の教育」の理念を踏まえ、郷土教育の一貫としての「山坂達者」実践推進事業の体力・気力づくりを基本にしながら各校種別の部会テーマを決定し研究に取り組んできました。つまり「鹿児島の教育」の特色が十分発揮される大会に努めてきました。

大会が終了した翌日、県実行委員会を開き本大会の反省を行いましたが成果として

1. 教科体育の授業の在り方について基本的なことがらが明確になり、研究授業、授業研究に対する見方、考え方が高まった。

2. 学習活動のなかでは、教師の発問と指導法の改善、工夫によって、児童生徒の自主的、自発的な取り組みが見られた。
3. 児童生徒が自己の能力を十分把握し、課題(目あて)を設定して、課題解決のために積極的に練習方法等を自から工夫しようとする態度が出てきた。
4. 運動の特性に応じた学習評価のあり方についての取り組みも高まってきた、などであった。

この研究大会の貴重な体験を土台に、今後は日常の研究実践活動を積み重ね、児童生徒の健康増進、体力の向上と楽しい体育を目指しながら豊かな人間性の育成に努力していきたいと考えています。

終わりに、本大会の運営に御尽力くださいました日本学校体育研究連合会をはじめ、御指導を賜りました文部省ならびに県教育委員会、関係市町教育委員会、各分科会場校、それに適切な御指導、御助言をいただきました講師の皆様に心より厚く御礼を申しあげます。

第24回全国学校体育研究大会分科会報告

学体連の会長、副会長、常務理事等が手分けをして、分科会場をまわった。以下は、限られた時間で訪問した報告を、限られたスペースに綴ったものである。

〈会長　大　石　三四郎〉

第5分科会指宿市立柳田小学校

この柳田校の研究主題は「一人ひとりが生き生きと運動に取り組むための体育の学習指導法」＝個に応じためあての持たせ方＝とかかげている。一般授業と研究授業ともに学習指導案がよくできていた。特に運動実技の目標だけでなく、協力、助け合い、教え合って楽しくやる精神目標、また、評価法についても十分の工夫がされていた。

登れ　のぼれ…柳田小学校

第15分科会特殊教育諸学校部会

特殊教育諸学校部会の研究大会もその回を重ねること8回にして、漸くその形態がほぼ完全になってきた。そして、その内容も特殊教育諸学校として学校毎によくまとめられていた。これによって、今後、全国大会における特殊教育諸学校の研究が大きく前進することが期待される。従って鹿児島県の果した役割は大変意味のあるものであった。

〈副会長　鈴　木　正　三〉

第6分科会川内市立川内小学校

第10分科会川内市立川内中央中学校

私は川内市担当として、川内市立川内小学校（校長桐野定雄）川内市立川内中央中学校（校長正木敏夫）の2校を県実行委員会の案内で昭和60年10月15日視察した。先ず川内小学校を午前9時50分〜11時00分、次いで中央中学校を11時30分から昼食をはさんで2時30分迄、公開授業や分科会に臨んだのでその結果を報告する。

(1)　川内市立川内小学校

教頭の出迎えで公開授業会場へ、ここで校長や講師(三重大学教授作野史朗)の先生方に挨拶後「なわとび遊びと鉄棒」担当森田志津子教諭の公開授業の後半の一部と第3校時の「体操とマット運動」担当竹迫正美教諭の公開授業を11時頃迄見学した。森田先生は赴任後3年目、竹迫先生は10年のベテランであった。共に熱心で子供達に良く融和し、部会研究主題の具体化に努力している立派な授業であった。桐野校長はこの研究大会に関連して次のようなことを話してくれた。私はこの地区の校長会の会長で、昭和59年度から川内市小学校体育研究中心校となり「自分の体力を知り、めあてをもって楽しく取り組む体育学習の在り方」を中心テーマとして教科体育の授業の充実を図りながら「知・徳・体」の調和のとれた発達を目指す学校教育の中で体力の向上と健康増進を図り心身ともに健康で豊かな生活を営む能力や態度を育てることを目標にして計画的、組織的、継続的に学校経営に専心してきたので、今回の大会も県から話しがあった際素直に躊躇なく積極的に全教職員一致で承諾し会場を引受けたということ。校庭の排水坑の設置、三育の森アスレチックコースの作成などの苦労話を交えながら、昨夜来の大雨でも全教職員はもとより、ＰＴＡの協力で内・外両様の準備が早朝からなされ、こうして皆様を迎えることができたなどなど——

川内市立川内中央中学校では、正木校長や香川大学教授岸純子先生などに挨拶、課題意識をもち、意欲的に運動に取り組む生徒の育成を目指す学習指導のあり方を研究主題とするダンス、バスケットボールの公開授業を見学することは出来なかったが、公開授業をテーマとする分科会、ならびに長崎県の「課題意識をもち、すすんで学習する生徒の育成——バスケットボールの授業を中心に——」の研究発表や鹿児島県中学校体育連盟ダンス専門部の分科会主題についての研究発表などを内容とする分科会に臨むことが出来たばかりでなく、普通学校や特殊学校の経験を持った広い視野で教育に当っておられる正木校長から次のようなお話をきく機会が得られたことは幸であった。

(1)　昭和57年創設され4年目を迎えた新しい学校で、60年4月着任したばかりの校長であるが、伝統に左右されず、特殊学校の経験を活かした学校経営、教育課程、部活動、ＰＴＡ活動などに及ぶ広汎な教育に対する考え方に立ったお話を聞くことができた。

(2)　分科会は100余名の方々が参加し、活発に討議が行なわれていた。

(3)　九州地区の研究発表にみられるように他県の本大会に寄せる協力に感心した。

(4)　講師先生の適切且つ具体的な指導助言や司会の準備の良さや分科会の盛り上げ方は印象的であった。

終りに感想の一端を述べ報告としたい。

両会場とも綿密な計画に支えられた実践活動で、公開授業分科会とも100人から200余名の参加者の評価は高いものがあったと思われた。

何よりも私が感銘をうけたのは、一人一人の児童や生徒の利益ということが指導の価値を図る唯一の基準であると考えておられる先生方の指導であった。即ち、一部の児童や生徒のためとか、教師自身のために全体を犠牲にするというところが全くなかったことが公開授業における子供達の態度や分科会における討論に見られたことなどである。

「生涯体育を指向し、豊かな人間性を育成する学習指導の在り方」を研究主題とし、これが具体化に努力された成果がみられたことが、鹿児島大会の成功をもたらしたものと感激するとともに、お礼を申し上げ報告といたします。

〈常務理事　遠　藤　秀　夫〉

第8分科会　鹿児島市立西紫原中学校

研究授業　格技（剣道）　公開授業　陸上競技

研究発表　ほぼ満員の体育館の中で「剣道の特性にふれる喜びを味わわせ、すすんで課題解決に取り組む剣道学習のすすめ方」というテーマで研究発表がなされ、すばらしい効果をあげているのに感銘を受けた。中でも「変化する対人的条件下での攻防－「しかけ技」の学習に重点をおき、構え ——くずし——打突　という攻防の技術を中核として指導しているという発表が、印象的であった。

第9分科会　鹿児島市立伊敷中学校

研究授業　体操　　公開授業　バレーボール

研究発表　「一人ひとりが自己の能力に応じた課題をもち、意欲的に運動にとり組むための学習指導はどのようにすればよいか」というテーマで、「障害走」と「体操」について発表があった。その中で「体操学習で仮説を設定して主題にせまる」という研究体制や、その方策として「選択制」を導入し、生徒が運動課題を自ら選択して、生涯楽しく運動できるよう、その基礎作りをしている、という発表だった。

〈常務理事　福島良久〉

第1分科会　錦ケ丘幼稚園

8時30分頃に会場に到着した。公開保育30分前である。すでに園長室には市内の公立、私立の園長の先生方が5〜6名つめかけていた。広い園庭、環境の整備された園庭で園児が嬉々として遊んでいた姿が印象的であった。「いろいろな遊具を使ってたのしく遊ぶ」という研究主題と一つとなった遊びのようすであった。9時前には、すでに50〜60名位の参加者がつめかけていた姿を見ながら、次の会場へ出発した。

第3分科会　玉江小学校

ちょうど公開授業が開始された直後に会場に到着した。300名位の参加者が、授業学級の囲りを囲んで人をかきわけて中に入って参観する程の盛況であった。広い校庭に多様な体育施設が設置され、しか

も整備され、とてもうらやましく思った。授業も充実し工夫がなされ、楽しさの中にも基礎となる能力を十分身につけさせることや、学習の個別化などへの配慮がみられた。一斉指導と個別化の学習の調和をどう図るかが今後の課題であろうと感じつつ学校を去った。

第2分科会　中州小学校

中州小学校に到着したのは、最後の公開授業がはじまろうとしている時間であった。本校の研究領域は、模倣の運動・表現運動であった。特に感動したことは、男子の教師が堂々と自信をもって表現の指導をしている姿であった。6年生の児童一人一人が「対立する感じ」を運動場で楽しく表現していた。授業研究の話し合いは、取り上げた題材「白血球と細菌」が適切であったか、指導計画の問題などがでていた。参加者は約160名位であったと思う。

第12分科会　甲南高等学校

学校に到着したときは、ちょうど格技（柔道）の口答発表が行われているところである。高等学校としては、東京では見ることのできない広々とした体育館で70～80名位の先生が熱心に聞き入っていた。柔道は、わが国の伝統的な武技の一つであるとか、相手との格闘的な対応の中で旺盛な気力、克己、礼儀、公正などの態度が養われるなどの発表内容を耳に残しながら、次の会場に出発した。

第4分科会　西谷山小学校

本校は昭和58年～60年度までの3年間、文部省の体力つくり推進校の指定をうけ、「めあてをもって自ら活動し運動に親しみ体力つくりに励む子どもの育成」を主題に、三年次の研究発表の公開でもあった。玄関入口には「山坂達者」の標が立てられ、校舎の裏山の斜面を活用した手づくりの遊具やアスレチックなどが整備され、特に、「はだし」による体育活動が行われていた。研究協議会に300～400名位の参加者が居残り、研究発表・協議が行われていた。

＜常務理事　齋　藤　昭　二＞

第13分科会　鹿児島県立錦江湾高校

主　　題　健康・体力つくりに意欲的に取り組む生徒の育成を目指す学習指導のあり方

公開授業　バスケットボール　（錦江湾高校）

閑静な自然環境で、桜島と錦江湾を一望する景観に恵まれ、裏山には『山坂達者コース』が設定されている。公開授業は、教師・生徒ともにランニングシャツに単パンで師弟同行の感あり。

山坂達者コースの概要紹介

(ｱ)コースの全長740m（女子コース520m）

(ｲ)登り坂287m　階段145段

下り坂248m　階段112段

(ｳ)附属施設、パワーラック、ロープ、雲梯、腹筋台

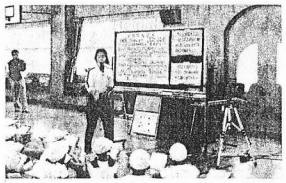
第14分科会　鹿児島県立鹿児島工業高校

主　　題　意欲的に運動に取り組む学習過程の試み。

研究協議　個人差に応じて一人ひとりが意欲的に学習する陸上競技（走高跳）の指導（別府商高）

77年の歴史と伝統を感じさせる会場で、別府商業高校から、生徒に、いくつかの目標を持たせ、一つでも達成させることによって意欲を持たせる発表があり、熱心な質疑応答があった。

＜事務局長　重　田　　一＞



姶良小学校　立田まり子先生の研究授業

第7分科会　姶良町立姶良小学校

9：30第7分科会・姶良町立姶良小学校に着く。ご案内は県教委指導主事桑原三木男先生。田圃の中に新しくできたといった感じの、しかも堂々たる校舎。正しく然り、人口増で6年前にできた学校。中野博校長は2代目。10数人がサークルになる。1年生あり6年生ありの郷中教育よろしくの全体体育。昨夜降って今朝あがる好運の体操。よく動いて素晴しい。「かがみにうつったもうひとりのわたし」3年1組、ピアノをひきながら指導もする立田まり子先生の授業。

ぴんぴんとびと、もうひとりのわたし。次から次へとよくとび、発表し、ビデオを自分達で操作して反省する。明るく元気な3年生。表現運動―台風上陸。川上博先生によく指導された5年3組のけんけんとびは、一つの威力であった。正に台風上陸。グループごとの発表も見事。昼のアトラクション、7人の先生方の表現運動も立派。意気込みがいい。

急いで第11分科会　姶良郡加治木町立加治木中学校へ。跳び箱運動。2年7・8組、指導は岩下勇三先生。指導助言の矢野久英先生に伺ったところ、「いい発表でしたよ」

支部だより

岩手県

岩手県の組織・活動について

岩手県学校体育研究協議会会長
岩手大学教育学部教授
伊　藤　章　一

本県における幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学等の体育指導相互の一貫性と学校体育の振興を図るために発足した県学校体育研究協議会も、本年で第24回大会を迎えることになりました。ここに組織と活動状況の一端を紹介します。

1. 組織について

本研究協議会には、県国公立幼稚園協議会、県私立幼稚園連合会、県小学校教育研究会体育部会、県中学校並に県高等学校教育研究会保健体育部会、県大学保健体育研究協議会等が加盟し、事務局を岩手大学教育学部保健体育科内に置いている。

なお、役員は、各学校種別及び市・県教育委員会から理事・副会長等が選出され、会長以下31名をもって構成されている。

2. 活動状況について

主催事業として県学校体育研究大会、県学校体育実技研修会を行っている。一方、各学校種別の部会でも毎年、それぞれの主題にしたがって、盛大に研究発表大会や実技研修会等を開催、一層の実を深め高めている。59年度における研究大会は、「教材開発への取り組み」という主題のもとに、講演や各種別からの推薦された実践研究を踏まえた事例発表が盛会裡のうちに行われた。また、岩手という積雪寒冷という地域の特性から、1月に県学校体育指導者対象に、スキー実技研修会が網張スキー場を会場に、1泊2日の日程で、幼稚園から大学までの教員約100名の参加を得て、真剣な熱気溢れるスキー実技の研修と冬季体育にかかわる研究協議が行われた。なお、本年も「教材開発とその実践」をテーマとして、研究大会並に、実技研修開催の準備が進められている。

和歌山県

和歌山県の活動状況

和歌山県学校体育研究協議会副会長
和歌山県立田辺商業高等学校校長
乾　　武　夫

和歌山県は、気候が温暖で豊かな自然に恵まれているものの地理的には南北に長く、且つ中・南部は山地が多い。このため、学校相互の連携、全県的な交流もはかりにくく、郡市単位の活動にとどまっていた。昭和48年に、和歌山市において第12回全国学校体育研究大会が開催され、これが契機となって、学校体育への関心も一層高まるとともに県下の統括的な組織の確立への気運も生じ、昭和49年度に、和歌山県学校体育研究協議会が発足した。

この協議会は、県下小学校体育の充実・向上を目的として昭和48年に発足した県小学校体育連絡協議会、中学校体育を統括している県中学校体育連盟、高等学校における教科体育の充実を目指す県高等学校保健体育科研究会で構成されている。会の目的は学校における体育教育の諸問題についての研究を行ない、小・中・高の連携を図ることである。県知事が会長で、小・中・高三団体の会長が副会長となって運営している。この会の特徴的な事業の一つは、県学校体育研究大会で、県下8郡市持ちまわりで開催している。12回目の本年度研究大会は、有田地方で開催、その内容は次のとおりである。

1. 表彰　功労者3名、功労団体1校
2. 講演　「私と体操競技」遠藤幸雄日本大学教授
3. 研究発表「児童の意欲を高める水泳指導」等
4. 研究授業　吉備中学校　「器械運動」等
5. 研究協議　「体育授業における諸問題」等

近年、生涯体育につなぐ体育学習指導を求める声が強くなってきている。このために、小・中・高の一貫性は、更に重要である。本会も、これらの動向を的確に把握し、今後一層充実を図っていきたい。

「心と体を育てる自然教室」よみがえる子どもたち

文部省初等中等教育局長　高石邦男
㈶青少年交友協会理事長　森田勇造　編著
学習研究社　東京都大田区上池台（〒145）
定価　1,400円

「生きる力と、助けあい、思いやる温かい心をもった子どもを育てるための『自然教室』は、私たち大人から、子どもたちへの最大の贈り物。70人の子どもたちとの無人島での生活の記録は、21世紀の早春の夜明けを感じさせる。

㈶日本学校体育研究連合会会長　大石　三四郎　評

「足もとから見直そう」

日本教育シューズ協議会　筑波研究センター所長　花　山　　亘

昨秋、朝日新聞・東京本社科学部、見角記者が取材のため、本部事務局（岡山市）に来局され、同取材記事が11月3日(日)付29面「みんなの健康」の欄に「運動靴にも通気性が大切です」の見出しで掲載されました。内容は、藤田紀盛・筑波大学（運動生理学）の「穴あき靴（教育呼吸シューズ）は靴内の温湿度を早く下げる効果がある」という研究を中心に、子供の足と望ましい運動靴についてでした。とりわけ、水虫に似ているが、運動靴の通気性の悪さが原因で起こる「運動靴皮膚炎」についての、読者の反響はすさまじいものでした。全国から寄せられた約3,000通の問い合わせの殆どは、「運動靴皮膚炎」に悩む子を持つ親達からのものでした。戦後40年、ハイテクの時代に、子どもの足もとだけは昔ながらにみじめなままです。私達のささやかな活動も10年目を迎えた今年「子供達の足を救わねば」の思いをあらたにしております。

○問い合わせ先　〒305　茨城県筑波研究学園都市
東新井34－6中山ビル1F
TEL．0298－52－6531

—業界レポート—

明るくなった学校

榎並商事株式会社　代表取締役　　榎　並　秋　晴

私は、いわゆる「ネーム・マーク」屋です。
今年も多数の学校で採用されました。大変好評でありがたく感謝致しております。機会が与えられましたので、現状報告致したいと思います。

私共の「ネーム・マーク」とは、フロッキー文字と、体育着用ゼッケン文字の2種類を主な商品として、家庭のアイロンで簡単（10秒〜30秒）に接着でき、美しく立体的で且つ洗濯に強く、消えたり剝離しない製品です。

最近、中学校を中心として、制服、制鞄、制靴等着るもの、持ち物を統一する傾向が非常に強くなってきました。その結果生徒達は入学時より自分の持ち物と他人の持ち物との区別（識別）に大変苦労するようになりました。と同時に「トラブル」も又多く発生しているようです。

一方学校側はこの問題に的確に対処しているのでしょうか、具体的な「名前のつけ方」や「方法」を指示していないのが実情のようです。

今春、都内有名私立中、高校生徒約4千人が、「フロッキーネーム」を採用されました。こんな学校でも外部に洩れては困る問題があったのです。

「学校を明るくする」要因はたくさんあると思いますが、この「ネームをしっかりつける」ことが完全に実施されるならば、暗い話しの大部分はなくなるのではないでしょうか。

上記の学校では、忘れ物もなくなり、大声で怒ることも少なくなった、と話してくださいました。

「この小さなネーム」を正しくきちんとつけることは、決して小さなことではないのです。

私共は、より良い製品をより広く、より安くご使用いただくために、頑張っていきたいと思います。

—研修会レポート—

第16回全国学校体育実技研修会を終えて

学体連　常務理事
東京都目黒区立中目黒小学校校長　　福　島　良　久

日本学校体育研究連合会主催、東京都小学校体育研究会主管による、第16回全国学校体育実技研修会が、東京都目黒区立中目黒小学校を会場として、8月29日(木)、30日(金)の2日間にわたって開催されました。

○研修会の趣旨「小学校では、基本的な事項を示すにとどめている学習指導要領の目標や内容の理解に努めながら、そのなかで、児童一人一人が運動の楽しさを味わうことを重視しつつも、発達段階に応じて何を目指し、何を身につけさせたらよいかを手さぐりしているのも事実である。

このような時、全国の教師を対象に、開催地の研究団体と共催して、実技を通して、各運動領域の特性をおさえた学習課題を具体化し、指導のポイント及び評価について研修し、指導力の向上を図る」

○テーマ「学習課題達成の喜びを体得させる体育指導と評価」の趣旨、テーマに即して開催された実技研修会でした。

定員150名でしたが、全国から184名の参加者がありました。受講者は、「基本の運動」「ゲーム」「ボール運動」「表現運動」「体操」「器械運動」の6領域にわたって、体育館、校庭の二つの場所をローテーションして受講した。体育館も狭く感じ十分体を動かすこともできない位満員でした。

受講者も暑い日ざしの中で、体全体汗びっしょりになりながら、見学する人もなく、一人一人が熱心に研修に取り組んでいました。その熱心な研修態度に頭がさがり敬服いたしました。研修の休憩時間に麦茶をのみに殺到していた姿が、今もなお体育館に出入するごとに思い出されてきます。こんな熱心な先生方に、毎日指導される子供達は幸せだと目頭があつくなる思いがしました。

講師の先生方も、筑波大学助教授春山国広先生、同笠原成元先生、同小原晃先生、東京学芸大学長沢靖夫助教授、東京女子体育大学の馬場京子先生、東京都教育庁体育課及び教育研究所、東京都の区・市教育委員会の指導主事、東京都小学校体育研究会の各研究領域の研究部長など、大学、行政、現場の実践家と多彩な充実した講師陣でした。そして、学問的立場から、行政サイドから、現場実践の研究成果を生かしながら熱心に懇切にご指導しておられました。

2日間にわたって暑い中、学体連の浅田副会長、重田事務局長も会場につめきりでした。特に、東京都小学校体育研究会、小学校体育連盟の常任理事の先生方には、早朝から受付けや講師の接待、研修の会の運営に非常なご尽力をいただきました。

閉講式での受講者の一人一人の先生方の表情は、2日間の研修を総てやり終えたという満足感、充実感に満ちあふれているようでした。

最近、教師自身が集団行動様式も身に付いていないとか、「気をつけ」「休め」の正しい行動様式も知らない、また、児童に正しく指導することもできなくなったとか、一つ一つの教材についてもそのわざも知らない、指導のポイントも理解していない、指導も十分にできない教師が多くなってきたなどの指摘をよく耳にします。

このような指摘や現状を見聞するにつけ、一単位時間の授業の場面で、指導する教材についての教師自身の示範が部分的にでもできるようになって欲しいとの期待や願いをもっています。

小学校では、全科を担任することや教師自身の体育嫌い、老年齢化などとの関連から困難な点もありますが、それを克服していかなければならないと強く感じています。

全国体育実技研修会の大きな意義もここにあると思います。今回は、地方の参加者が一部の地域にかたよっていたと思います。次年度は、それぞれの地方から参加者が増えることをご期待申し上げます。

***** 事　務　局　だ　よ　り　*****

事務局長　重　田　一

1.　全国学校体育研究大会について

11月14日、15日、鹿児島大会が立派に修了した。3,000名に近い先生方が全国から集まり、それぞれが思いを新たにして帰って行かれたことだろうと考えると、大会のもつ意義は大きい。

昭和61年度以後、決定している開催県等については、次のようになっている。

(1)　昭和61年度　第25回　兵庫県

全体会場　神戸市文化ホール
分科会場　幼稚園　1　小学校　6
中学校　5　高　校　3
養護学級1　計　16
期日　昭和61年11月20日(木)、21日(金)

(2)　昭和62年度　第26回　宮城県
(3)　昭和63年度　第27回　愛知県
(4)　昭和64年度　第28回　中国・四国・九州地区のなかから?

全国学校体育研究大会東・中・西部別開催一覧
(昭和63年度まで)

年度	回	東	中	西
昭和37	1	千　葉		
38	2		兵　庫	
39	3			鳥　取
40	4	東　京		
41	5		岐　阜	
42	6		大　阪	
43	7	福　島		
44	8			高　知
45	9			長　崎
46	10	埼　玉		
47	11		福　井	
48	12		和歌山	
49	13	山　形		
50	14	東　京		
51	15		滋　賀	
52	16			熊　本
53	17	群　馬		
54	18	東　京		
55	19	東　京		
56	20		大　阪	
57	21		新　潟	
58	22	神奈川		
59	23			沖　縄
60	24			鹿児島
61	25		兵　庫	
62	26	宮　城		
63	27		愛　知	

全国学校体育研究大会開催一覧（▨は開催県）

2.　表彰要項について

現在、全国大会開会式の直前に行われている全国保健体育優良校・功労者の表彰は、優良校は昭和26年度から、功労者は46年度から始められた。

全国保健体育優良校・功労者表彰要項に基づき、各都道府県推せん委員会から学体連会長あて推せんされた候補を、中央審査委員会が審査、決定するものである。

昭和26年度は20校、27年が28校、28年が20校、29年が19校、30年が27校という受賞校数は、加盟の県の数とも関連があると思うが、現在とは大きな差があることを感じる。昭和60年度は優良校121校、功労者139名である。

このような実態から、優良校・功労者ともに、バランスのとれた、権威ある表彰をするために、表彰要項を見直す必要があると考えられた。

現行の表彰要項の2、推せんの数は、次のようになっている。

(1)　推せん校数は、各都道府県ごとに3校までとする。但し、東京都、特に希望する政令都市をもつ道府県にあっては、4校まで推せんすることができる。

第1表　昭和59年5月1日現在都道府県別学校（小・中・高校）数一覧
文部統計要覧　昭和60年版

No.	都道府県名	学校数	No.	都道府県名	学校数	No.	都道府県名	学校数
1	○北海道	2,924	17	新　潟	1,184	33	岡　山	789
2	青　森	817	18	富　山	417	34	○広　島	1,098
3	岩　手	887	19	石　川	492	35	山　口	685
4	宮　城	793	20	福　井	372	36	徳　島	460
5	秋　田	574	21	岐　阜	744	37	香　川	354
6	山　形	647	22	静　岡	985	38	愛　媛	653
7	福　島	1,007	23	○愛　知	1,600	39	高　知	545
8	茨　城	938	24	三　重	730	40	◎福　岡	1,318
9	栃　木	708	25	滋　賀	391	41	佐　賀	349
10	群　馬	646	26	○京　都	794	42	長　崎	764
11	埼　玉	1,423	27	○大　阪	1,833	43	熊　本	874
12	千　葉	1,372	28	○兵　庫	1,453	44	大　分	661
13	東　京	2,791	29	奈　良	457	45	宮　崎	501
14	◎神奈川	1,544	30	和歌山	582	46	鹿児島	1,014
15	山　梨	389	31	鳥　取	285	47	沖　縄	476
16	長　野	729	32	島　根	489		計	41,538

都道府県名の左の○印は政令都市1つを、◎印は2つもつことを示す。

第2表　全国保健体育優良校・功労者推薦校数・推薦人数
S. 60. 11. 13 (水)

学校数	都道府県	推薦校数（以内）	計（校）	推薦人数（以内）	計（名）
2000以上	東　京 ○北海道	6校×2都道	12校	8名 6名	14名
1000以上 2000未満	◎神奈川 ◎福　岡	5校×2県	10校	5名×2県	10名
	福　島 埼　玉 千　葉 新　潟 ○愛　知 ○京　都 ○大　阪 ○兵　庫 ○広　島 鹿児島	4校×10府県	40校	4名×10府県	40名
1000未満	上記以外の33県	3校×33県	99校	3名×33県	99名
計	47都道府県		161校		163名

○印は政令都市1つを、◎印は政令都市2つをもつことを示す。

(2)　推せん候補者数は、各都道府県ごとに3名までとする。但し、東京都は6名、特に希望する政令都市をもつ道府県にあっては、4名までとすることができる。

そこで、新しく推せんの数を決定するに当っては都道府県の学校数を基礎とし、政令都市を有することを考慮した。

学校数については、文部統計要覧　昭和60年版に拠った。

各都道府県が推せんできる校数、人数は、以内の数で、それだけ推せんしなければならぬものではない。

鹿児島大会の前日、昭和60年11月13日、鹿児島サンロイヤルホテルでの、学体連評議員会、理事会において、第2表のことが決定された。昭和61年度から実施される。

昭和61年度都道府県推せん委員会からの推せん期限は、61年6月28日(土)あたりになろう。

3. 学体連主催の研修会・講習会について

明年度、次のような研修会・講習会を計画、実施致しますので、是非ご参加下さい。
要項は5月中に各都道府県等にお送り致します。

第17回全国学校体育実技研修会要項
【幼稚園の部】

1. 趣旨
幼児期は、人間らしい動きを身に付ける時期である。本来、幼児は運動や遊びを好むものであり、物や友達にかかわっていろいろな遊びを経験しながら、様々な動きや能力、態度を身に付けていく。ところが、近ごろの幼児の中には遊びを知らない、運動を好まない幼児がふえてきて問題になっている。
この研修会では幼児の発達をふまえながら、個人差を生かし、幼児自らが進んで運動や遊びを行うようにするために、日常の保育活動の中で環境をどう整え、遊びをどのように進め、指導したらよいか、実技を通して探ろうとするものである。
2. テーマ
幼児が自ら進んで取り組む運動や遊びの指導
3. 期日
昭和61年8月26日(火)、27日(水)
4. 内容
(1) 幼児の発達特性と遊びの教育的意義(講義)
(2) 鬼遊び集団遊び、動きのリズム、手遊び、大型遊具・小型遊具を用いた遊び、等の指導法(実技)
5. 会費　4,000円
6. 定員　100名
7. 会場　東京都内の公立小学校体育館
(併設幼稚園のある学校)

第17回全国学校体育実技研修会要項
【小学校の部】

1. 趣旨
小学校では、基本的な事項を示すにとどめている学習指導要領の目標や内容の理解に努めながら、そのなかで、児童一人一人が運動の楽しさを味わうことを重視しつつも、発達段階に応じて何を目指し、何を身につけさせるかを、手さぐりしているのも事実である。
このような時、全国の教師を対象に、開催地の研究団体と共催して、実技を通して各運動領域の特性をおさえた学習課題を具体化し、指導のポイント、つまずきに応じた手だて及び評価について研修し、指導力の向上を図ろうとするものである。
2. テーマ
学習課題達成の喜びを体得させる体育指導と評価
3. 期日
昭和61年8月28日(木)、29日(金)
4. 内容
◦基本の運動　◦ゲーム　◦器械運動　◦体操
◦陸上運動　◦ボール運動　◦表現(水泳)
5. 会費　4,000円
6. 定員　150名
7. 会場　東京都内の小学校

第6回障害児キャンプ指導者講習会要項

1. 趣旨
現在、全国の養護学校、特殊学級には、多くの障害をもつ児童・生徒が在籍しており、その指導には、担当の教師が日夜苦心しているところである。
このようななかにあって、本講習会は、日常生活との関連が深く、かつ学習プログラムを含んだキャンプ運営の理論と実践を通して、現場教師の指導力を高めようとするものである。
2. テーマ
指導力を高める障害児キャンプの理論と実践
3. 期日
昭和61年8月19日(火)～21日(木)　2泊3日
4. 内容
講義　組織キャンプの沿革
キャンプのプログラム
グループワークの理論と実際
障害児の医学的理解
実習　野外炊飯、キャンプファイアー
入浴介助
映画　障害児キャンプの実際
5. 会費　16,000円(宿泊費、資料費、講師謝金雑費にあてる)
6. 定員　30名
7. 会場　東京YMCA山中湖センター
〒401-05　山梨県南都留郡山中湖村平野
電話　05556－5－8204

4. ビデオ・カセットの販売について

正しい性教育を進めるために、生徒の要求に合致する資料を求めることは意外にむずかしいと思われます。学体連では、先生方のご希望に応じられるようにと、次の性教育指導シリーズのカセットを販売することになりました。
5巻一括でも、分割でもお求めになれますので、指導計画に沿ってご購入下さいますようご案内申し上げます。

【性教育指導シリーズの内容】　産婦人科医の全国団体(社)日本母性保護医協会が、教育現場・臨床現場における「10代の性」の現状調査をもとに企画製作した作品です。医学知識を、正確に、しかも感動的に伝え、全作、文部省選定を受けています。

1. あなたは女性－女性の生理学　(17分)
女性の性機能の仕組みと生命の精巧さを分りやすく解説する。○女性の性周期の出発点　○卵子の旅　○女性の生理の大原則　○女性の性の働きの中心　○排卵を知る手段　等
2. 妊娠と出産　(20分)
生命創造に果たす母性の役割とその偉大さを印象づける。○生命の始まり　○男性の性機能　○性交　○性の決定　○妊娠の成立と胎児の成長　○出産の経過　○生命誕生　等
3. 避妊の科学　(17分)
避妊に対する正しい考え方と、基礎的な知識を理解させる。○避妊の基本的な考え方　○性周期と受胎　○オギノ学説　○基礎体温　○避妊の方法　○人工妊娠中絶　等
4. 男性の生理－その性のなりたち(20分)
同世代の男子の生理的、性的な実態を理解させる。○男性・女性の違い　○男らしさの発現　○男性器の形態的特質　○男性の性機能　○精通と初潮　○キンゼイ・レポート　等
5. 青春の医学－帯下と感染　(20分)
“気にはなるけど、相談しにくい女性の悩み”の解答編。○細菌と人間の共存関係　○生理的帯下の働きと仕組み　○月経周期と帯下　○膣の自浄作用　○性病　○泌尿器感染症　等

【価格】　ビデオ　VHS・ベータ各巻　¥20,000
Uマチック　各巻　¥23,000
16ミリ　17分作品(1,3)　¥90,000
20分作品(2,4,5)　¥100,000

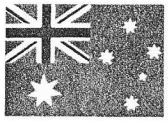
【申込方法】　申込日・住所・学校名・担当者名・電話番号・作品名・型式(VHS等)を明記の上、ハガキ又は封書で、下記までお申込み下さい。
〒151　東京都渋谷区代々木神園町3－1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
(財)日本学校体育研究連合会
会長　大石三四郎
＊　送金については、申込書到着後ご連絡致します。

―― 編集後記 ――

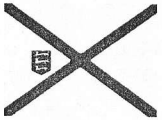
年末の忙がしい時期に、御執筆をお願いした各先生方の御協力で、会報第19号を発行することができました。どうもありがとうございました。
教育の問題が、今ほど社会的な関心を集めている時はなかったと思います。心の深層と社会のひずみとのかかわりが問われていることなので、直接児童・生徒に接している私たちは、時流の中で安閑としてはいられません。教科として、児童・生徒の身体と精神の発育、発達に直接、働きかけていかなければならない、学校体育の責任は大きいと思います。
戦後、混乱する社会状勢の中で、日本国民の将来を危惧して、新進気鋭の体育教師がつくった体育指導者連盟の基本理念を、その本流を継いでいる、学校体育研究連合を構成している一人一人が、想い起こして、改めて体育科教師の使命感を自覚することが社会の要請に応える第一歩ではないかと思います。
鹿児島での全国学校体育研究大会がその主題に、“豊かな人間性を育成する”を選択した底流には、このままでは駄目だという危機感があったと思います。
参議員議員の柳川覚治先生には広い視野から学校体育について自由に語っていただきました。会長はじめ理事の先生方には、研究を推進していくための考え方、教育現場で行なわれている実践研究の意義と研究活動のすすめ方について書いていただきました。全国大会に参加できなかった先生方に鹿児島の匂いを少しでもかいでいただこうと会場のようすをまとめてみました。
編集について御意見、御希望がありましたら、事務局の方にお知らせください。

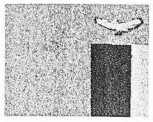
学体連幹事
筑波大学附属盲学校教諭　伊藤忠一

Lawn Bowls


Australia

Papua New Guinea


Jersey


Zambia

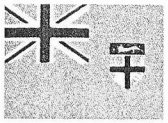
England

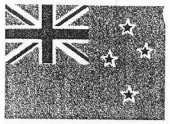
Canada

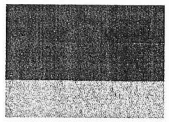
手軽に楽しめる太陽の下のスポーツ

美しく刈りこまれた芝生の上を、偏心球のボウルが滑べるように転がっていく。ボウルのバイアス(ゆがみ)を考え、ジャックまでの距離を見極めた上で投げる緻密な力加減、太陽の下で行われるローンボウルスは、若者からお年寄りまで広く愛されている健康的なスポーツです。
ローンボウルスが生まれたのはイギリスです。

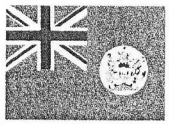
Guernsey

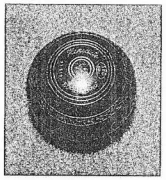

Fiji


New Zealand


Malawi

Wales

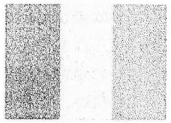

Hong Kong

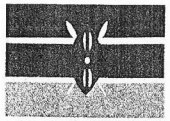


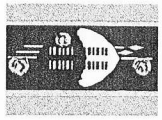
Scotland

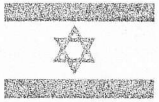
ローンボウルスはイギリスで生れたスポーツです。
大英博物館に2人のプレーヤーがローンボウルスを楽しんでいる1300年代の絵があり、約700年前から行われていたのではないかといわれています。
イギリスの旧植民地を中心に世界にひろがり、手軽に楽しめる太陽の下のスポーツとして世界20ヶ国で1980年オーストラリアのFRANKSTONで第4回世界大会が開かれた時の写真です。
○詳しい説明については
0798－64－5111・開発課／上山まで

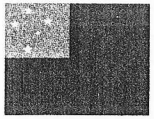
Japan


Ireland


Kenya


Swaziland


Israel


Western Samoa

U.S.A.

株式会社 ウエヤマ
本　　社 〒663 西宮市樋ノ口町1丁目12－2 ☎(0798)67－0810(代)
東京営業所 〒107 東京都港区赤坂8丁目13-19-104 ☎(03) 408－6500(代)